

同じ性能を維持する。



ホルベインの絵具づくりは、6工程の顔料テストではじまり、4工程の製品テストで終わります。絵具の主役である顔料が常に定まった色相をつくりだすか、そして油絵具になった後、そのすべてに発色、耐光性、固着力、安定性が保たれているかどうか。絵具は生き物。だから機械でつくられても常に同じ状態が生まれるわけではありません。同じ性能を維持するためには、細心の注意が必要なのです。ホルベイン絵具の命は品質です。

●油絵具20号(130ml)チューブ、40色新登場。大きいサイズでも、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都品川区東品川2-10-6 TEL.03(3962)8216 大阪府東大阪市上小島1-2-10 TEL.06(4723)0154



holbein

ホルベイン絵具
www.holbein-works.co.jp

holbein

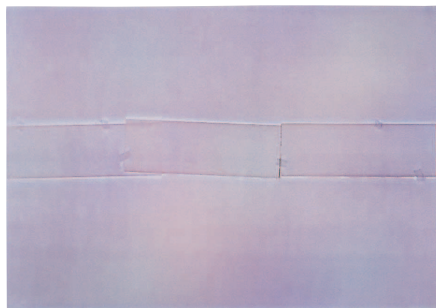
天野純治

透層する平面の間合いと呼吸

鷹見明彦 文 森田ケン 写真・映像



1978年、葉山の一色海岸にて。ウインドサーフィンをはじめて、熱中していた。《EDGE》シリーズのシルクスクリーンで、国際青年美術家展や版画コンクールで受賞し、版画協会賞を受けたが、版画だけの作家になるつもりはなかった



EDGE 77-E-2 1977 BFK紙にシルクスクリーン 630×910cm

1977

「画面が、イリュージョンによって3次元の空間になるのは嫌でした。もの派やミニマルズムの影響から、シルクスクリーンで物質感のある平面をつくろうとしました」

湘南といえば海が目に見え、海が目に浮かぶが、海岸道路を離れれば、すぐに山が迫ってくる。アトリエに向かう車も谷を上がり、崖の斜面が間近な一軒の庭先にはいり込む。芝生の上には、白いサーフ・ボードが転がっている。「ここに住んで二十年以上になりますが、一時期はウインドサーフィンに熱中していました」。釣りもするという画家の眼差しは、緊張感のある堅牢な作風のように、底に鋭さを潜めている。海開きを待つ季節のなかで、時は、ロング・ヘアーが似合ういた七〇年代へと還っていく。

七〇年代のはじめ、美術予備校に通っていた青年は、「東京ビエンナーレ一九七〇―人間と物質」展を観たり、神田の画廊などで最盛期にあった「もの派」の作家たちの発表の現場にふれて、現代美術を志した。斎藤義重や「もの派」の新人たちにあこがれて、多摩美に入学した。八王子にできた新キャンパスの一期生だった。そのころのアートシーンでは、シルクスクリーンによる作品が脚光



1984

「版画と並行して、絵画的な作品をつくるようになりました。
版による表現の特性を絵画にフィードバックしながら」

EDGE 84-K-2 1984 パネル、キャンバス、BFK紙に鉛筆、アクリル 63×91cm

を浴びていた。大学に通いながら版画工房でアルバイトをして、シルクヤリトグラフの技法を身に付けていった。

「旗や標などの平面のモチーフを平面に描くジャスパー・ジョーンズ、初期のステラやジャッドのミニマルな作品が好きだったので、シルクスクリーンは、マチエールに頼らずにコンセプトを明快に写し取るところが魅力でした。」

当時流行っていたシルクスクリーンの作品は、写真製版で写真や印刷物を転写したり反復したりする表現が多かったが、天野がめざしたのは、よりミニマルで物質感のある平面作品だった。三年から専攻した版画コースでは、版による絵画表現の多くを学んだ。

《EDGE 7-E》(一九七七)は、大学院を修了する前後から現代美術や版画のコンクールに次々と応募して、受賞しはじめたころの作品。ケント紙でつくった型を型押ししてエンボス(凹凸)をつけた紙に、オイルカラーに三原色によるドットが刷

られている。

「画面がイリユージョンによって、三次元の空間になるのは嫌でした。」

「版画よりも『ものの派』から受けた影響はとても大きかった。型押しによって紙自体をフロッタージュしたり、鉄筆でつくるエンボスも、平面を物質化するためにはじめました」。その後は、ベタ刷りによって絵具を厚く重ねて、さらに物質感を強めた作品によって多くの版画コンクールで受賞するが、「版画」に限定した作家になる意識はなかったという。

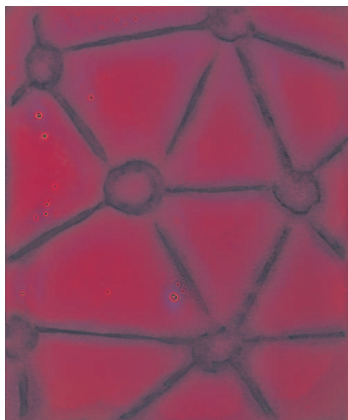
《EDGE 84-K-2》(一九八四)は、アクリル絵具でペイントしたパネルに、鉛筆で表面を塗りつぶしたキャンバスを巻いた小パネルをはめ込んだ作品。「鉛筆で、硬質な質感を出そう」としました。この時期は、ボードを鉛筆だけで塗りつぶした作品もたくさん制作しましたが、パネルの側面も塗ったりしました。僕の場合、描くのではなく『つくる』という意識が強かったと思います。

このころから版画と並行して、絵画的な作品を本格的に制作しはじ



2002

「紙の感触のなかで、微妙にズれていく
規則性や塗り重ねに生まれる間合いに、
開かれる空間があるのです」



上—FIELD OF WIND #02010 2002 アルシュ
紙にアクリル、鉛 900×1250cm 撮影=内田芳孝
下—FIELD OF WIND #03305 2003 BFK紙にシ
ルクスクリーン

めた。キャンバスやパネルを支持体とするカラー・フィールドな作品もつくられたが、九〇年代の半ば以降は、アルシュ紙にモデリング・ペーストで地塗りをして層をつくった上に、アクリルや顔料をスキージで重ねていく、紙によるペインティングを多く制作するようになった。

「紙には、キャンバスにはない身近な感触があるんです。僕の作品は、筆で描く表現にはない版による表現の特性を、絵画に導入しています。何層も地塗りをくり返して、物質感の

強い表面やエッジをつくったりするの
も、シルクスクリーンの重ね刷りに
似ています」。

九五年から一年間のフィラデルフ
イアでの在外研修では、五十点以上
のペーパー・ペインティングを制作し
た。現地で偶然に「ワークス・オン・
ペーパー」という紙の平面作品を専
門に扱うギャラリーと出会ったこと
も、紙による表現の幅広さと醇^{ゆた}かさ
をあらためて知って、制作を進めて
いく励みになった。

《FIELD OF WIND#02010》(二〇〇

あまの・じゅんじ 1949年鳥取県生まれ。75年、多摩美術大学美術学部絵画科油画科卒業、77年同大学院美術研究科修了。95-96年に文化庁芸術家在外研修員としてアメリカに滞在、制作。おもな個展に、77年田村画廊(東京)、80年以降ギャラリー山口(東京)、93年以降養清堂画廊(東京)で多数発表、96、99年ワークス・オン・ペーパー(フィラデルフィア[米])など。またグループ展・コンテストなどに、77年世界版画コンペティション(優秀賞受賞、サンフランシスコ近代美術館[米])、国際青年美術家展(日本文化フォーラム賞受賞、東京都美術館・京都市美術館)、80年世界版画コンペティション(最高賞受賞、サンフランシスコ近代美術館[米])、86年「現代の白と黒」展(埼玉県立近代美術館)、97年現代日本美術展(和歌山県立近代美術館賞受賞、東京都美術館・京都市美術館)、98年「現代美術というジャンル」(佐倉市美術館[千葉])、現代日本美術展(東京都現代美術館賞受賞、東京都美術館・京都市美術館)、2000年「天野純治・岡本敦生一痕跡一」(米子市美術館[鳥取])、「Domani・明日」展(安田火災東郷青児美術館[東京])ほか。9月20日まで養清堂画廊(東京)で個展開催中。



上——湘南の高台の庭に、アトリエはある。アメリカのギャラリーから注文のあった作品を制作し、送り出したばかり *

下——芝生の上には、ウインドサーフィンのボードが転がっていた *

二は、アルシュ紙にモデリング・ペー
ストとアクリル絵具でつくられたペ
ーパー・ペインティングのシリーズの一
作。透過する色彩が息づくフィール
ドに、微妙な変化をもってミニマルに
象眼された鉛片のポイントがリズム
を与えている。「鉛には、ほかの金属



◎たかみ・あきこ「美術評論家」

郡葉山町の作家アトリエにて取材

二〇〇三年七月十六日、神奈川県三浦

アトリエから近くの浜にでると、
夏を待つ海が、にぶい光のスクリーン
を展^{ひら}げていた。しばらく間をおいて、
また水に眼をやると、波がでてきた
のか、ウインドサーフィンの帆が、鈍
色の海面に漂う点になって散ってい
るのが映り込んできた。

より温かく柔らかでウェットな触感
があるところが気に入っています。
「間合い」は、重要です。一定の規
則性をもった間隔が少しずつズレた
り、塗り重ねにうらがでできることで、
呼吸する空間が生まれてくる。いわ
ゆるミニマルズムとはちがう、童安
寺の庭のように周りの空間にも開
け放たれながら、単純でしかも多く
を語るような……」。